

哲学以外

木田
元

哲学以外

木田 元



みすず書房

木 田 元
哲学以外

1997 年 6 月 30 日 印刷

1997 年 7 月 10 日 発行

発行者 小熊勇次

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 5 丁目 32-21

電話 3814-0131(営業) 3815-9181(編集)

本文印刷所 理想社

扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

©Kida Gen 1997

Printed in Japan

ISBN 4-622-03080-2

落丁・乱丁本はお取替えいたします

はしがき

去年の夏、みず書房の守田省吾さんから、これまで書いたエッセイめいた文章をまとめてみないかと誘われた。私は哲学の勉強をしているので、哲学の研究書や解説書を書いたり、海彼の哲学書を翻訳したりするのが本業であるが、たしかにそのほかにも、エッセイというほど上質なものではないにせよ、雑文のたぐいを結構書いている。コピーをとってみたいいい加減な量になったので、守田さんにお願ひして本にしてもらうことにした。哲学の論文ではないという意味で『哲学以外』、少しふざけすぎかもしれない。

そんな雑文を書く暇があったらもっと真面目に勉強しろと言われそうな気がするが、哲学の本や論文を書くのはひどく気の張るものである。相当の精神的緊張を強いられる。それよりは人の書いたものを翻訳している方が気が楽である。で、つい翻訳に手を出してしまう。哲学書の翻訳もずいぶんやった。共訳が多いが、三十冊くらいはやったかもしれない。だが、これも根気のいる仕事である。最近仕上げたカッシーラーの『シンボル形式の哲学』（岩波文庫）など、原書で千二百ページあまり、文庫にして四冊、十年近くかかっている。できあがったのを見て、われながらよくやったものだと思え

もし感心もする。

本を書くにせよ、翻訳をするにせよ、いずれにせよ哲学の仕事は大変なのである。そこで、そういう仕事をしている最中にこの種の雑文の注文がくると、ついホッとして引き受けてしまう。早い話が逃避である。それにしてはずいぶん書いたものだが、要するに逃避ばかりしたがるいい加減な男だということであろう。

そんな雑文を集めて本にすることにどんな意味があるのかと問いつめられても、答えようがない。意味などあるとは思われないが、強いてこじつければ、日常生活と哲学の勉強をすることとははざまを見ていただくのに多少役に立つかもしれない。哲学をやっているからといって、朝から晩まで哲学の本ばかり読んでいるわけにはいかない。そんなことをしたら、たぶん頭がおかしくなるだろう。文学書も読めば、ミステリーのたぐいも読む。モーツァルトも聴くし、はやりの歌も聴く。映画も見ると、悪口を言いながら俗悪なテレビ・ドラマも見る。学生とおしゃべりもするし、友人と酒も呑む。哲学の本を読んだり書いたりすることとそうした日常生活とは、それほど一々直接の結びつきがあるわけではないにしても、まったく無関係とも言いきれない。もともと哲学の勉強をしようと思ったた動機はそうした日常生活のうちにあったにちがいないし、哲学書を読もうと思う気持ちにも、どこかに日常生活とつながる臍の緒のようなものがあるはずだからである。そうした発想の動機にまったくふれずに書かれるので、哲学書がひどく抽象的になってしまい、一般の読者にとって縁遠いものになってしまうのではなからうか。

私も若いころは、学問一途に生きております、飯をくうだの酒を呑むだのそんな卑俗なことは考えたこともありませんといわんばかりの論文を書いていた。いや、同業者相手の紀要の論文のようなものはそれでいいのだし、そうでなくてはならないのかもしれない。テキストのこの部分はこう読むべきだ、こう解釈しなければならぬといったいわば専門的技術的な問題を扱うのであろうから。しかし、それは所詮手段にかかわる論議であって、問題はその先にあるような気がする。そして、哲学というのには、オリンピックくではないが永遠のアマチュアリズムを本領とするもののように思われる。日常生活とまったく無縁な、いわば専門的な哲学などというものに、果たしてどれほどの意味があるものだろうか。自分がそもそも哲学の勉強をしようと思いついた初発的な動機を忘れるべきではない——と、そんなふうに思うようになったので、一般の読者を対象にした本を書くようなとき、私は意識してそうした臍の緒をさらけ出すようにしてきた。自分が大学の哲学科に入って哲学の勉強をはじめる前に——そのころ私は田舎の農林専門学校生徒だったが——、つまりまったく一般の読者として哲学書を読むうとしたときに哲学書に感じた不満を思い出しながら、なるべくそれに応えようというつもりで書いてきた。

そんな意味でなら、ここに集めた雑文は、哲学の本を読んだり書いたりする営みと、私の生活のそれ以外の部分とのつながりを垣間見ていただくのに、いくらか役に立つかもしれない。といっても、先ほども言ったように、なにしろ哲学から逃避しようとして書いたものが大部分なのだから、そう都合よく役には立たないであろう。あまりそんなことは期待しないで読んでいただきたいというのが本

音である。なにしろ不真面目な男なので戯文に類するものも多い。変な期待をもって読んで、腹を立てられても困る。

一方、それとは逆に、『哲学以外』と銘打ちながら、そのわりに哲学者や哲学書にからんだ文章が多いではないか、羊頭狗肉と詰問されるかもしれない。これも、哲学の学術論文ではないといった程度の意味に解して、ご勘弁いただきたい。論文集に入れるわけにはいかないような文章を拾ったのである。書いたものは、このほかにももう少しあるが、話の重なっているものは外したし、新聞に書いた書評のたぐいもあまり入れなかった。

それぞれの文章の最後に発表した場所と日付が記してある。必ずしも執筆年代順には並んでいないので、書いた時と場所を念頭に置いて読んでいただければ幸いである。表題や見出しは、大部分そのつどの編集者の付けてくれたものである。

守田省吾さんには、前任者の吉田欣子さんに続いて、メルロ＝ポンティの翻訳ではさんさんお世話になっている。こんな本まで作っていただいて御礼の言葉もない。心から感謝しています。

一九九七年三月二日

木田 元

目 次

はしがき i

一 アンケートに答えて

旧著再読 日夏耿之介「三代の象徴詩風」——わが文学の師	3
わが古典 二葉亭四迷訳『四人共産団』——文章修行の教科書	7
短編小説ベスト3 少しヤケ気味に選んだ三冊	11
文庫本ベスト5	15
私の好きな映画・ベスト5	19
私の全集 『日本名著全集』（「江戸文芸之部」全三十巻）	23
近代俳句・この一句 土蜂うなるうとうとと土になりたや 和田光利	25
想い出深い手紙から 私を懐然とさせた一通の往復葉書	27
私の文章術 文章とはまずリズム	31

私の海外旅行 言葉の通じぬ中年女性十人と、ブカレストで三時間語る	35
日本の大学どこがダメか 哲学の勉強は武術の修業のようなもの	39
建築の青春	43
半山形県人	47

二 本と音楽と人の話

読書ノート	53
二十世紀の名著 私の三冊	59
書物と人との出会い	66
佐伯先生のこと	77
清水幾太郎『倫理学ノート』をめぐる雑感	83
上山さんのこと、『世紀末ドイツの若者』のこと	92
川村二郎『アレゴリーの織物』	98
ホサカのこと	101
保坂和志『季節の記憶』	107

塚本康彦『ロマン的断想——荷風のことなど』を読む……………	109
風太郎随想……………	116
〈矢吹駆シリーズ〉と哲学……………	121
笠井潔『黙示録的情熱と死』……………	125
笠井潔『群衆の悪魔』を読む……………	129
哲学も壮大なフィクション……………	134
推理癖……………	138
カフカの仕事部屋……………	140
教養のもう一つの水脈……………	144
『否定弁証法』翻訳談……………	148
モーツァルト四曲……………	151
大塚博堂ファンクラブ始末記……………	159
三 少しは哲学めいた話も……………	165
世界になる前の世界……………	165

「自然」をめぐって 180

技術の正体 196

西欧的知と自然——ドイツ観念論と現象学によせて 201

ヨーロッパ思想の凋落 209

思想における野生の復活を 218

『反哲学史』の楽屋ばなし 225

「運命」について 230

「こころ」について 235

ライヴァルたち 239

理性の力への懷疑——デカルト生誕四百年に思う 254

シェリングとニーチェ——「自由の体系」と「永劫回帰」 258

ハイデガーとライブニッツ 273

マッハとニーチェ——その〈現象学〉をめぐって 278

ハイデガーとニーチェ 282

ハイデガーとの付き合い方 288

ハイデガーという難問……………	291
哀悼 J・P・サルトル——思想への責任のとり方について……………	298
数学で命を落としかけた話……………	304
哲学を求めて……………	308

四 追悼記

斎藤信治先生……………	315
斎藤忍随さんを憶う……………	317
あの頃の細谷さん……………	322
あの輝ける日々……………	326
友なくていまは——生松敬三を偲んで……………	330

— アンケートに答えて

ここに集めたのは大部分、「安原顕独断編集」と銘打って出された書評誌『リテレール』のアンケートに答えて書いた文章である。この雑誌は毎号アンケートを出し、その応答原稿で特集を組んでいた。哲学の論文や哲学書の翻訳で疲れた頭を休めるのにちょうど手頃な分量なので、気ばらしにせつせと書いた。次のものを除いてすべてそれであり、冒頭にゴシックで組んであるのがアンケートのテーマである。それ以外の「私の全集」は『図書新聞』、「近代俳句・この一句」は『新潮』、「半山形県人」は『山形新聞』のやはりアンケートに答えて書いたもの、「建築の青春」だけが『a』という建築雑誌でおこなった「高山建築学校」をテーマにした座談会に付けたコメントである。

旧著再読 日夏耿之介「三代の象徴詩風」——わが文学の師

最近ようやく『日夏耿之介全集』を手に入れて、うれしくて仕方がない。もともと、一九九一年の第二版、それでも八巻本で十八万円もした。七六年の初版はいくらだったか忘れたが、とても手が出ず、口惜しい思いをしたことだけは覚えている。

日夏耿之介には特別の思いがある。この詩人はある時期——むろん活字を通してのことだが——私の文学の師匠だった。といっても、私の父よりもさらに十歳も年長の詩人だから、リアル・タイムというわけにはいかない。私が読みはじめたのは、彼の活動期がとうに過ぎた戦後のことである。最初に読んだのは、昭和二十三年に角川書店から出た季刊誌『表現』の創刊号と第二号に連載された評論「三代の象徴詩風」だった。第一回分の末尾に「昭和十二年九月二日脱稿」とあるから、これも戦前に書いたものを戦後発表したことになる。第二回分には「昭和廿三年三月三日草」とある。新たに書き継いだということであろう。前後して創元社から、昭和四年に刊行された『明治大正詩史』が増補され、三巻本で再刊された。これも夢中になって読んだ覚えがある。まだ十九歳、哲学などはじめていなかったから、詩への感受性も鈍っていなかったのだろう。

すっかり日夏ファンになって、その後も日夏耿之介という名前が目につくと買いこんでいたが、當時でさえその名前はあまり見かけられなくなっていた。晩年に出された訳詩集『唐山感情集』（昭和三十四年）が、この詩人の本で入手した最後のものだった。

だが、なんといっても心に強く残ったのは最初に読んだ「三代の象徴詩風」で、幾度読みかえたことか。掲載誌の『表現』二冊は今も大事にもっているが、戦後の刊行物としては上質の紙を使った垢ぬけた雑誌と思っていたのが、今ははがれた表紙がセロテープでとめられ、紙は真っ茶色に変色している。「三代」とは、むろん明治・大正・昭和のこと、蒲原有明、北原白秋、萩原朔太郎、それに日夏耿之介御当人をまじえた四人の詩人によって象徴詩が「造立」された跡を辿ろうというもので、第一回分が、一、俳諧情趣詩の前存在、二、明治象徴詩の出發、三、有明集の高みと含蓄と、の三章から成り、第二回分が、四、邪宗門の形式美。もっと書き継ぐつもりであつたらしいが、白秋のところで中断されている。

これに教えられて白秋や朔太郎を読みはじめたのはむろんのことだが、私が強い影響を受けたのは、むしろ日本における象徴詩成立の前史を論じた第一章からであつた。そこでは、松岡青蘿を中心に、蕪村、暁臺、几董、成美ら安永、天明、明和期の俳人たちの作品を採りあげ、これを良経・定家・俊成ら新古今の歌人や、王漁洋・金冬心といった明末清初の詩人、それにジョン・ドン、^{マサ}キイツ、ロゼッティ、リルケ、ポオといった欧米の象徴詩人の作品と比較し、それに勝るとも劣らないと顕彰してみせる。

なにしろ芭蕉を論じても、

菊の香や庭にきれたる履の底

を「全句中での最も卓抜な飽きのこない秀句」と断じてみせたり、青蘿の絶唱として、「こころおさまりて時雨聞夜は墨絵の竹のすれあふ音も聞ゆなり」と詞書した、

何處やらに花の香すなり小夜時雨

という句を挙げてみせてくれたりするのだからこたえられない。言われてみると確かにそんな気のしてくる、断定的で好悪のみごとにはっきりした鑑識眼と、その自分の眼識へのおそろべき自信に圧倒されて、天明朝の俳諧に凝ってみたり、新古今に耽溺したり、王漁洋や金農の詩集を探しまわったり、すべて日夏耿之介に導かれて文学修業をした感じである。そう言えば、かなりあとになってからのことだが、岩波の「中国詩人選集二集」の一冊として、高橋和巳の受けもった漁洋・王士禛の巻が出されたときには、やっとめぐり逢えた、快哉を叫んだものだった。「秋来、何の處か最も銷魂なる、残照西風白下の門」にはじまる秋柳詩など、習字の練習のように幾度も書き写して、日夏の眼識に改めて感服したものである。

「英吉利象徴文学概説」など、その頃いくら手を尽くしても探し当てられなかった日夏の作品をすっかり網羅した全集が出たのであるから、欲しがっても仕方あるまい。やっと手に入れた全集、しばらくは机辺に飾って楽しんでいたが、先日それではと、改めてこの全集版で「三代の象徴詩風」を読んでみて、小さな発見をした。この全集版には、『表現』の創刊号に掲載された第一回分しか収録さ